

FUJINOMIYA SHINKIN BANK

みやしんの現状

DISCLOSURE

2018.9

ごあいさつ

みなさまには、平素より富士宮信用金庫をお引き立ていただき、心より御礼申し上げます。

富士宮信用金庫では、みなさまに私どもへのご理解を一層深めていただくため、ここにディスクロージャー誌「みやしんの現状2018.9」を作成いたしました。本誌では当金庫の業績、経営、業務内容、地域に対する取り組みなどをご紹介しますので、ご高覧いただき、当金庫についてより一層のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

さて、10月1日に発表された日銀短観では、原油価格の上昇や、相次ぐ自然災害の影響、米中貿易摩擦の懸念から、先行きの業況判断は横這いで推移し、足踏みを示す結果となりました。当地区においても製造業の回復は認められるものの、その他の業種においては好況感が行き届いていないとの声もあり、米中貿易戦争の終息が見通せないなか、景気の先行きに懸念を強めております。このような状況下、金融界においては、日銀が導入したマイナス金利政策の長期化により、預貸金利ざやばは縮小し、金融機関を取り巻く環境は一段と厳しさを増し、抜本的な経営効率化の必要性が問われております。

こうした中、当金庫では、お客さまの事業の成長可能性等を適切に分析し、財務情報だけでは読み取れない、企業の力を見極める事業性評価に基づく支援への取り組みを強化しております。事業性評価に基づく融資は、その評価に基づき「お客さまが抱える課題解決のための融資」として、担保・保証に頼らず成長性・将来性を見据えての融資となります。お客さまの課題を一緒に特定し、その解決策を考えていくことが、お客さまとのリレーションを深めていくことに繋がります。同じ目的と同じ目標、共通認識をもって、お客さまとともに一緒に悩み、行動し、粘り強くサポートしてまいります。そのための強い意志とスキル、熱い情熱をもつ人材の育成に引き続き取り組んでまいります。

一方、人口減少や少子高齢化時代を見据え、当金庫では多様化する顧客ニーズに対応するため、新商品の開発や導入、既存商品のリニューアル等を含めサービスの一層の充実を図るとともに、将来の金融ニーズやお客さまのライフプランのお手伝い、情報交換の場として営業系の定期積金によるお客さま訪問の強化を図り、当金庫の持つ外部支援機関とのネットワーク情報や培ってきた知見を還元してまいります。

「地域の成長と前進を求め、みなさまと共に歩みます」の経営理念のもと、地域・お客さまから最も支持され、身近でお気軽にご利用いただける信用金庫を目指して、地域内シェアの向上と営業基盤の強化に努めるとともに、お客さま本位の良質な金融サービスの提供と金融仲介機能の発揮による円滑な資金供給により、協同組織金融機関として、確かなビジネスモデルを構築してまいります。

みなさまにおかれましては、より一層のご支援、ご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年11月

理事長 **山本 勝則**

「みやしん」の健全性

- 1 平成30年9月期の本業の収益を示す業務純益は1億9百万円、経常利益は2億80百万円、当期純利益は2億34百万円を計上しました。
- 2 安定した自己資本により高い健全性を確保しています。
自己資本比率は27.47%となり、国内基準（4%）を大幅に超えており極めて健全な財務体質となっています。
- 3 地域金融機関として、地域経済活性化に積極的に取り組んでいます。
地域金融機関として、お客さまとの長期的な取引関係を重視し、中小企業の育成と地域経済の活性化を図る「地域密着型金融の機能強化」の着実な実行に努めています。
- 4 厳正な自己査定、償却・引当により資産の健全性を高めています。
貸出金の健全性を維持するため厳格に償却、引当をしています。
- 5 徹底した管理体制によって健全経営に努めています。
・リスク管理、コンプライアンス（法令等遵守）管理態勢の強化に努めています。
・お客さまの保護及び利便性向上をはかるために「顧客保護等管理方針」等を定め、地域から信頼され愛される金融機関になるように取り組んでいます。
- 6 お客さまからの信頼のバロメータである預金は、平成30年9月末で3,239億56百万円となりました。

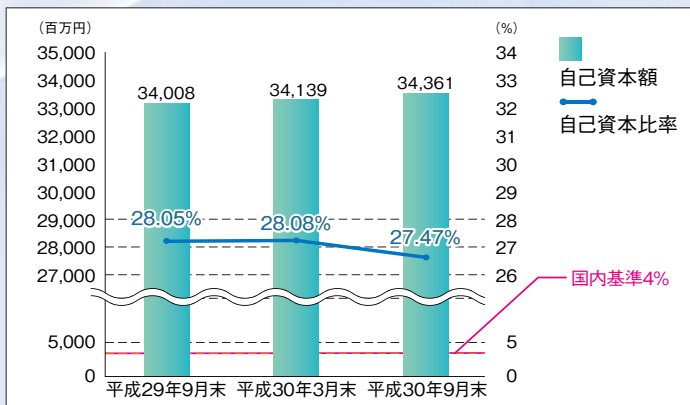
自己資本

自己資本比率(国内基準)の状況

「みやしん」の自己資本比率は、27.47%と高い水準を維持しております。

「自己資本比率」は、金融機関の健全性を示す重要な指標です。平成30年9月末の「みやしん」の自己資本比率は27.47%と国内業務を行う金融機関に課せられた基準である4%のほぼ7倍となっており、財務の健全性・安全性は引き続き高い水準を維持しています。「みやしん」の自己資本比率が充実しているのは、業容を拡大していく過程で利益を将来のために、地道に積上げた結果によるものです。

自己資本比率の推移



自己資本比率

自己資本額(343億61百万円) (ハ)

リスク・アセット(1,250億68百万円) (ニ)

27.47%

自己資本の額

(単位:百万円)

コア資本に係る基礎項目		
普通出資又は非累積的永久優先出資に係る会員勘定の額		34,319
コア資本に係る基礎項目の額に算入される引当金の合計額		75
コア資本に係る基礎項目の額(イ)		34,395
コア資本に係る調整項目		
無形固定資産(モーゲージ・サービシング・ライツに係るものを除く。)の額の合計額		33
コア資本に係る調整項目の額(ロ)		33
自己資本		
自己資本の額(ハ)=(イ)-(ロ)		34,361

リスク・アセット等の額の合計額

(単位:百万円)

項目	
信用リスク・アセットの額の合計額	118,753
オペレーショナル・リスク相当額の合計額を8%で除して得た額	6,315
リスク・アセット等の額の合計額(ニ)	125,068

(注)当金庫は国内基準を採用しております。また、信用リスク・アセットの額の算出にあたり標準的手法を、オペレーショナル・リスク相当額の算出については基礎的手法を採用しております。

銀行勘定の金利リスク

金利リスクとは、市場金利の変動によって受ける資産価値の変動や、将来の収益性に対する影響を指しますが、当金庫においては、双方ともに定期的な評価・計測を行い、適宜、対応を講じる態勢としております。具体的には、一定の金利ショックを想定した場合の銀行勘定の金利リスクの計測を行い、ALM委員会等で協議検討するとともに、経営陣へ報告を行うなど、資産・負債の最適化に向けたリスク・コントロールに努めています。

運用勘定			調達勘定		
区分	金利リスク量		区分	金利リスク量	
	30年3月末	30年9月末		30年3月末	30年9月末
貸出金	702	725	定期性預金	428	392
有価証券等	1,315	1,398	要求払預金	401	413
預け金	1,110	1,404			
運用勘定合計	3,128	3,528	調達勘定合計	830	805

銀行勘定金利 リスク	(単位:百万円)		自己資本に 対する割合	(単位:%)	
	30年3月末	30年9月末		30年3月末	30年9月末
	2,297	2,722		6.73	7.92

銀行勘定の金利リスク量(27億22百万円)
自己資本額(343億61百万円) ×100=7.92%

- (注) 1.当金庫では、金利ショックを99パーセンタイル値として銀行勘定の金利リスクを算定しております。
2.当金庫は明確な金利改定間隔がなく、預金者の要求によって随時払い出される預金のうち長期間滞留する預金をコア預金と定義し、普通預金等の額の50%相当額を期間2.5年としリスク量を算定しております。
3.銀行勘定の金利リスクは、運用勘定金利リスク量と調達勘定金利リスク量を相殺し算定しております。